



Title	吉田喜重作品研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	朱, 依拉
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第14180号
Issue Date	2020-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80076
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Zhu_Yila_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：朱 依拉

	主査	教授	応	雄
審査委員	副査	教授	阿部	嘉昭
	副査	准教授	浅沼	敬子

学位論文題名
吉田喜重作品研究

・当該研究領域における本論文の研究成果

吉田喜重の映画に関する先行研究は多数なされてきたが、特に重要視されてよいと思われるのが 1970 年代に発表された蓮實重彦や波多野哲朗をはじめとした批評家の論評と、『ユリイカ』の吉田喜重特集や複数の論者による論集『吉田喜重の全体像』といった、2000 年に入ってから『鏡の女たち』の公開後に盛んに行われた研究・評論である。これらの先行研究に多くの達見がみられるが、吉田喜重の作品に関する作家論研究の単著は依然として欠如するままであった。本論文は、単独の吉田喜重の作家論を初めて試みたものであるという点で評価に値する。

また、従来の吉田研究では劇映画に重点を置く傾向があり、ドキュメンタリー作品に関する考察が充実しているとはいえない。本論文は、四つの章からなる第二部を設けて吉田のドキュメンタリーについて、個別の作品分析のみならず全般に関連する論考を展開させており、従来の吉田喜重研究と一線を画すものとなっている。とりわけ『美の美』シリーズは、2013 年にフランスで DVD ボックスが発売されるまで、テレビ放送時にリアルタイムで観た者を除いて鑑賞の機会がなかった。そのような事情もあり先行研究がみられないなか、本作品を取り扱う第七章は、吉田本人によるナレーションや個性的なカメラワークと、吉田の映画思想とを関連づけながら詳細な分析を施しており、顕著な新規性を有する研究成果である。

吉田喜重の劇映画作品を扱う第一部においても、先行研究の観点と論述から刺激を受けつつも、筆者独自の視点によって吉田の劇映画作品を読み直す作業を行なっている。第五章の『鏡の女たち』論はその一例であり、吉田喜重の集大成とも目される同作を、原爆映画の文脈において原爆の表象不可能性という視座から、またヒロイン（岡田茉莉子）の語りの質から、精緻な再考を試みている。

・学位授与に関する委員会の所見

審査委員会は、本論文が上述の点において充実した研究成果を上げていると評価する。一方、論文に残る問題点についても具体的に指摘した。ドキュメンタリー論の部において比較的新規性を有する論考が展開される一方、劇映画論の部では詳細な分析を行なっているものの、意表を突く新たな発見は個別の箇所に見られるに止まっている。吉田の映画論、ドキュメンタリー論を取り上げているものの、それらに通底する吉田の映画観・映像観の執筆者自身の解釈まで至っておらず、吉田作品を構成する諸要素に対する、また吉田の作歴全体に対する執筆者自身の解釈も十分に整理されているとは言い難い。吉田作品に頻出する鏡やガラスの表現について、執筆者は先行研究の成果を吸収したうえで吉田作品に沿いつつ具体的に検討しているが、透明性と反射性を軸とする先行研究の発想と理論的枠組みを突破して独自の視座を獲得するまでに至っていない。また、松竹時代の映画活動や、政治三部作、特にそのうちの北一輝に焦点を当てた緊張感あふれる『戒厳令』についての記述が不十分である。サルトルやアラン・レネからの影響に関して多く触れているが、それ以外の思想家や映画人とのつながりについての言及も補足する必要がある。ドキュメンタリーの諸章においては、オリジナル性を有する論述を展開させているが、映像論的作品『吉田喜重が語る小津安二郎の映画世界』を割愛してしまったことで、吉田自身に跳ね返る「まやかし」、また吉田の著作『小津安二郎の反映画』の革新性と自己矛盾につき別決することがなかった。また、上記の点以外に、審査委員会は一部の箇所における記述の緻密さを求め、文章表現をより厳密に推敲すべき箇所などについても具体的に指摘した。

審査委員会はこれらの問題点は主に、本論文の取り組む研究課題の新規性と、劇映画・ドキュメンタリー・映画批評といった多彩な映画活動を行なってきた吉田喜重が有する芸術的かつ思想的複雑性を本論文が貪欲に捉えようとするあまり、完全に追いきれなかったための瑕疵であったことを、口頭試問を経て確認した。今後、フランス思想・映画との関連、同時代の日本映画の文脈との関わりにより一層の注意を払いつつ吉田喜重の作品および思想の研究に取り組むことでそれらの微細な瑕疵が是正され、さらなる精密さに到達する研究成果が期待される。論文各所にみられる学位申請者のアプローチの真摯さはそれを十分に期待させるものである。以上を踏まえ、本審査委員会は全員一致で学位申請者に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。